日本比較文化学会中部支部
第 14 回支部大会

発表抄録

日時 2024（令和 6）年 9 月 29 日（日）

会場 椙山女学園大学

＊オンライン（Zoom）同時開催

日本比較文化学会中部支部 第 14 回支部大会　プログラム

日時：2024（令和 6）年 9 月 29 日（日）13:00～17:00（予定）
会場：椙山女学園大学　星が丘キャンパス
　　愛知県名古屋市千種区星が丘 17-3
会場世話人：樋口謙一郎（日本比較文化学会中部支部長）

＊オンライン発表者の方には 9 月 28 日（土）までに Zoom リンクをお送りします。オンラインでの聴講をご希望の方は同日 16 時までに、世話人までメール（higuchi@sugiyama-u.ac.jp）でお申込みください。
（当日のお申込みの場合、即時に対応できない場合がありますのでご了承ください。）

プログラム

12:30　　開場
13:00-13:10 開会の挨拶（中部支部長　樋口謙一郎）
13:15-14:15 基調講演　（司会　樋口謙一郎）
　　澤田敬人（静岡県立大学・日本比較文化学会会長）
　　「比較文化の好機－アフターコロナ時代のアフターカルチュラルスタディーズを踏まえて―」
14:30-17:15 自由研究発表　（司会　二村洋輔）
・川口泉（九州大学大学院）「日本語学校における初任日本語教師の困難感に関する研究」
・杉本貴代（愛知大学短期大学部）「日米の高等教育段階における海外留学の機会と実際」
　（休憩 15 分予定）
・二村洋輔（至学館大学）「井伏鱒二の「花の町」における現地人表象について」
・大﨑洋（愛知大学綜合郷土研究所）「幸福論からみる渡辺崋山」
・樋口謙一郎（椙山女学園大学）「タイダム族研究の示唆と展望」

　　終了後、閉会

基調講演

比較文化の好機
―アフターコロナ時代のアフターカルチュラルスタディーズを踏まえて―

日本比較文化学会会長　澤田敬人
静岡県立大学

比較文化を研究するのに良い時はあるのかと問いを立ててみた。結論としてはある。まず、比較文化の隣接領域で、時機が関係するケースを考えてみる。次に、現在のアフターコロナと呼ばれる時代の診断を行う。批判的な知の必要性が時機を決めると結論づける。

英国バーミンガム大学現代文化研究センターから発したカルチュラルスタディーズは、20 世紀後半の文化左翼かつ脱植民地主義の研究と社会実践で一世を風靡した。現在ではアフターカルチュラルスタディーズとの呼称を耳にする。

カルチュラルスタディーズが活発になるのは、まず、抑圧的な力が危機的なまでに意識化され、その力を批判する知が必要とされる時である。それはサッチャリズムの政治状況であり、新自由主義的な政治が一方的に市場原理を進める時代であれば、カルチュラルスタディーズの批判的な知が動く。そのような好機があることを認めなければ、社会実践との連動は難しい。

これまでのカルチュラルスタディーズの展開は、研究の前提として複数性を必要とする比較文化に影響を与えている。カルチュラルスタディーズの近代国民国家への批判により、多文化主義と人の越境が見えるようになった。国民文化形成でも移民や先住民への同化主義でもない、複数性への志向が、カルチュラルスタディーズと比較文化とで連動する。すなわちカルチュラルスタディーズにとっての好機は比較文化にとっても好機なのである。

そして、アフターコロナの時代において、抑圧的な力が意識される政治状況において批判的な知が必要とされると述べたように、近年のコロナ対策の保健政策にもその知が必要であるようだ。

自由研究発表抄録

日本語学校における初任日本語教師の困難感に関する研究

川口泉
九州大学大学院
地球社会統合科学府　博士後期課程

研究背景

新人の困難感に関する研究は、教育や医療など様々な分野で行われており、学校教育の分野ではメンタル面や成長支援に焦点を当てた研究が多く存在する。一方で、日本語教育における初任教師に関する研究は散見されるものの、日本語学校の実態と困難感を包括的に扱う研究は非常に少ない。日本語教師不足や未経験者採用の増加に伴い、現場での初任教師の支援が必要であるが、現場の実態に基づいた議論は進んでいない。

研究目的と方法

以上のことから本研究では、初任日本語教師の困難感の実態を包括的に捉えつつ、初任教師が現場の課題をどう捉えているか、また困難感同士の関連性についても検討していく。これらを明らかにするために半構造化インタビューを行い、得られたデータを SCAT（Steps for Coding and Theorization）により整理・分析した。

分析結果

初任日本語教師が抱える困難感について分析した結果、【学生】、【授業準備】、【研修・教育システム】、【連携・チームティーチング】、【カリキュラム・教育方針】、【待遇・報酬外労働】、【人間関係】の７つのカテゴリーが生成された。特に【学生】、【授業準備】、【待遇】に対する困難が強く見られた。【学生】に関しては、意欲の見られない学生や授業中の居眠り・私語等に関して様々な捉え方をしていた。【授業準備】に関しては、養成での学びの不十分さや教師用リソースのニーズの不一致、学校内による研修や共有のなさ等が複合的な要因となっており、多大な労力を要している。また【待遇】に関しては、【授業準備】および採点などの報酬外労働の負担と待遇のバランスが困難感を強くさせていた。

考察と今後の展望

以上から、初任日本語教師の困難は複数の要素が影響し合いながら複合的に生じていることが具体的に示された。授業準備を中心とした初任教師の負担の軽減が求められるが、教材の共有等をどう進めていくかは、中堅教師達の協力や、非常勤という雇用形態がどう影響を及ぼすかといった点なども含めて検討する必要がある。今後、対象者の数を増やすとともに、支援が行われている環境にある初任教師との比較や、経験年数による違いなども含めて、更なる研究が求められる。

自由研究発表抄録

日米の高等教育段階における海外留学の機会と実際

杉本貴代
愛知大学短期大学部

本研究では，日米の高等教育段階（大学・短大・専門学校）の学生（以下，大学生とする）を対象とする海外留学支援制度のしくみと留学者の動向，そして課題について，レビューを行った結果を報告する．

日米ともに大学生の海外留学支援には国と民間，またその組み合わせによる多種多様な支援制度があり，グローバルな視野をもつ人材の育成をその第一の目的としている．同時に，より多くの留学者を継続的に海外に送り出すことも課題として認識している．

本発表ではまず，日本と米国において国レベルで行われている留学プログラムの特徴とその背景を概観し，留学支援の目的を類型化して紹介する．そのうえで，とくに米国に特徴的と思われる，特定の学生向けの留学支援制度を取り上げ，その効果と示唆について考える．とくに本発表では，低所得世帯出身者の学生の留学支援を目的とした制度のしくみと効果を中心に検討する．より具体的には，同制度では民族マイノリティーの学生の留学行動を促しかつ効果的に支援すること，また留学後の学習アウトカムの高さやキャリア発達に貢献することについて解説する．最後に，米国の多様な学生に配慮した留学支援制度とその効果検証のあり方をふまえ，日本の大学生の留学支援の課題と示唆について議論する．

自由研究発表抄録

井伏鱒二の「花の町」における現地人表象について

二村洋輔
至学館大学

戦時中に公刊された井伏鱒二の作品である「花の町」は初出当時、「花の街」として 1942 年 8 月 17 日から 10 月 7 日まで全 50 回にわたり、『大阪毎日新聞』と『東京日日新聞』に同時連載された作品であり、1943 年 12 月に初刊された『花の町』に収録された際に表記が現在通用されている「花の町」に改められた。南方徴用作家の中には、明らかに時局に迎合し「堕落」した作家がいたと先行研究の中で痛烈に批判される一方、井伏鱒二をめぐる先行研究において彼の戦争に対する姿勢は反戦的、もしくは時局に迎合するのを拒否するような、消極的な意味での中立性を保持するようなものであったと評価されている。彼の記述の中には「どんなイデオロギーも、エリート性思念も・・・関わっていない」とすら主張する研究もある。そのような研究がある一方で、井伏の作品には「被害国やその国民を（ママ）同情する痕跡もな」く、「自国の立場で日本人が受けた苦難、戦争が自国民に与えた被害を強調し、戦争が他国にもたらした災難を無視した」と痛烈な批判をする研究もある。以前発表者は井伏に関する小論の中で、これまでの先行研究を批判的に検討しつつ、井伏の＜まなざし＞がもつ政治性について、『徴用中のこと』を分析し論じたが、同作品は戦後に出版されたものであり、かつ自身やその他の徴用作家たちの手記などに基づいたエッセイであった。今回の発表では、井伏が従軍中に執筆した創作作品である「花の町」を分析し、特に現地人表象に注目しながら、井伏の＜まなざし＞が持つ政治性について考察をする。

自由研究発表抄録

幸福論からみる渡辺崋山

大﨑洋
愛知大学綜合郷土研究所

「幸福論からみる渡辺崋山」につて、１．幸福について、２．鎖国時代のオランダについて、３．スピノザの幸福論、４．幸福論からみる渡辺崋山に分けて考察する。

『広辞苑』には、幸福とは「みちたりた状態にあって、しあわせだと感ずること。」とある。「欲求が満たされたときの持続的な満足感」ともいえ、幸福は気分や感情の微妙な変化を含んだ幅広い意味をもつ言葉でもあり、その捉え方は人によって、また、年代によっても違う。まさにその定義は様々といえる。多くの著書で幸福について、①「物質的・金銭的に豊かな幸福」より「精神的な幸福」を、②「刹那的な幸福」より「人生の幸福」を追求している。共通していることは、個人の幸福の要素として「健康」、「仕事」、「愛情」を挙げている。まさに、「健康」、「仕事（経済・地域活動・趣味等）」、「愛情（家族・恋人・友人）」は〈幸福の核心〉といえる。それぞれのバランスは個人差があるものの、健康であり、仕事や活動が充実し、家族内が満たされていないと、目を社会に向けることはできない。

幸福に至る道は、生活に余裕があり、社会的交流に恵まれ、人生の意義や信念に支えられるという、一定方向に向き、個人の人生にいくらかの安定が必要条件である。

鎖国時代、交流があったのは、中国とオランダである。崋山が生きた時代のオランダの哲学者はスピノザ(1632-1677)である。崋山とスピノザとの接点はないが、スピノザは「幸福とは自己が存在し続けるための努力であるとし、何人も、生存し行動しかつ生活すること、言いかえれば現実に存在すること、を欲することなしには幸福に生存し、かつ善く生活することを欲することができない」『エチカ「第４部定理 21」』 と述べ、精神の能動的な働きかけから生ずる喜び、この喜びが身体に反映して、外部に働きかけるという能動感情の重要性を指摘している。さらに、「共同体の成員の幸福を実現するには共同体の政治が善くないといけない。共同体の運営という社会的分業の中で、各人が自らの適正と能力に応じて適材適所でその能力を発揮するところに、それぞれの自己実現の充実感・幸福が成り立つ」と社会と個人の幸福について言及している。

開国前の封建社会に生きた崋山は、絵画に打ち込むものの、一人だけの幸福のことなど一生に一度も考える暇がなかった程、ひどく忙しい日々であり続けた。グローカルな精神で社会の幸福を願い続け、行動した崋山の生涯を幸福論の視点で発表したい。

自由研究発表抄録

タイダム族研究の示唆と展望

樋口謙一郎
椙山女学園大学

発表者は東アジア地域研究と言語政策学を専攻し、主に韓国現代史における言語、法、階層、社会慣習、対外認識などに関する規範形成と逸脱・乖離の問題を討究してきた。この経緯で、韓国においても消滅危機言語に関する問題（済州語や特定階層の社会方言など）が存在する一方、韓国では標準語政策ゆえに消滅危機言語の存在が見えにくく、諸外国・地域の参考事例との比較によってそれらを浮き彫りにすることが妥当ではないかと考えるに至った。また、「中央－周縁」関係の非固定性、少数言語集団と“超”少数言語集団の非対称的関係、サブグループ同士の葛藤関係の把握・討究が、消滅危機言語とその研究体制の持続可能性の確立において重要と考えている。

この考えから、近年、「他のアジア諸国と比べて大きな抵抗もなく」形成された国民国家であり、なおかつ多民族社会の性質を色濃く維持しているタイに注目し、その少数民族の様態に注目している。

タイダム族については、トンブリー王朝期の 1778 年に、タイ軍がヴェトナム北部のタンとモーイを攻撃した際、また、ラーマ 3 世時代の 1828 年に、タイ軍の北ラオスのホー族「征伐」の際に、ヴェトナムのディエンビェンフー近くまで進出し、多数のラオソーン・タイダム（黒タイ）族を伴って凱旋し、ペッブリーの北部へ入植させたという記録が残っている（綾部恒雄・林行夫編著『タイを知るための 60 章』明石書店、2004 年、123 頁）。現在でも服装や習俗、建築様式などにその特色を残している。

発表者の問題意識は、大きくは、タイ系諸民族（広義のタイ族）のマイノリティグループが「国民国家としてのタイ」と「多民族国家としてのタイ」という二つの状況下で、自集団に関する認識と表現をいかに行い、その結果としていかなる文化保全施策・戦略を採っているのか、またそれらの可能性が那辺にあるのかという点にある。本発表ではその一環として、タイ系諸民族のうちタイダム族の文化保全について現在進行形の事象を紹介し、示唆と展望を検討する。